

職業観と生き方の育成を目指して

～リーディングプロジェクト推進事業の一環として～

I 本校の概要

1 学校沿革と概要

本校は大正10年に創設された関町立実科高等女学校（翌年、岐阜県武儀高等女学校と改称）の流れをくむ県立高等学校である。昭和23年、学制改革により岐阜県立関高等学校と改称し今日にいたっている。90年余の歴史と伝統を有する本校は、地域を代表する普通科進学校であり、将来の地域社会・日本社会のリーダー養成のため、それに相応しい学力と心豊かな人間性の育成を図ってきた。

全校生徒の7割強は関市内の中学校から進学してくる。学区を同じくする美濃市からの進学者をこれに加えるとその数は85%に達する。卒業後の9割弱が四年制大学に進学する中、国公立大学には全体の4割ほどが進学する。私立大学の進学先としては、地元の中京圏のほか、首都圏・京阪神方面への志向が強いのが特徴である。

本校では、学習指導面だけではなく生活面での指導にも重点を置き、駐輪指導や交通安全指導、身だしなみや携帯電話使用に関わるマナーに関しても日々指導を行っている。部活動も盛んであり、今年度の成果としては、柔道部・放送部・ラグビー部（7人制）の全国大会出場、陸上部・男子テニス部の東海大会出場等、学業との両立を図りつつ実績をあげている。学校行事としては、学校を挙げて取り組む文化祭・体育祭のほか、例年4月に行われている強歩大会については、すでに63回を数える伝統行事として知られている。

2 学力向上フロンティアハイスクール事業

平成15年1月、本校では前項で紹介した従来の教育目標を再確認するとともに、より一層の発展を期して「関高ニューフロンティア」をスローガンに新たな出発をした。同年4月に、文部科学省より「学力向上フロンティアハイスクール事業」（以下、「フロンティア事業」と略）の指定を受け、学力向上の実績をさらに積み上げるべく努力を重ねてきた。その経過に関しては、平成18年5月に発表されているとおりである。フロンティア事業で培われた取り組みの成果については、今日も見直しを図りながらその志を継承していきたい。

以下にフロンティア事業の骨子を紹介しておく。

(1) 具体的な実践として

- ア 生徒一人ひとりの志望・能力・適性に合ったきめ細やかな教育の実践
（習熟度別授業、習熟度別学級編成等）
- イ より発展的な学習をとおしての高校生研究者の育成
（日本の大学研究、ノーベル賞研究、医療・福祉研究、郷土文化の研究、国連研究等）
- ウ 関高校学カスタンダードの定着
（関高学カスタンダードの作成とスタンダードテストの実施）
- オ 関高方式の学力評価法の確立

(2) 関高の目指すもの

- ア 生徒の学力向上と心豊かな人間的成長

- イ 生徒一人ひとりの多様な進路実現
- ウ 将来の研究者・専門家の育成
- エ 地域社会に貢献できる人材の育成
- オ 伝統校に相応しい校風（スクールアイデンティティ）
- カ 「マナーの良い関高生」「汗を流す関高生」「勉強をする関高生」の確立
- キ 客観的な学力評価法の確立
- ク 教員の指導力の向上

この事業の目標は、将来の地域社会・日本社会を担うリーダーに相応しい学力及び人間性の育成にある。しかしながら、地域に一校の普通科進学校ということもあって、生徒間の学力や進路意識に相当の隔たりがあるため、生徒ひとりひとりの志望・能力・適性に合ったきめ細かな教育が必要である。さらには、学校や生徒を取り巻く社会環境も、フロンティア事業の開始期と比べて急激に変化しており、新情勢に対応したさらなる改革が急務とされている。

3 進路指導部の取り組み

進路指導部は本校の各分掌の中にあって、フロンティア事業推進の一翼を担ってきたといえる。以下に、進路指導部の本年度の基本方針と具体的な取り組みの一端を紹介しておく。

(1) 今年度の基本方針

- ア 生徒、保護者と地域の期待に応えるべく、生徒の「学力の伸長」と「進路希望実現」を目指し、学年と連携しながら計画的、継続的な進路支援に努める。
- イ 「まずはその気にさせる、そして先が見えるまで努力を継続させる」。
- ウ 進路実現のために生徒と深く関わり、信頼関係を構築したうえで進路支援を行う。指導すべき内容の徹底を図る（曖昧な対応で形骸化させないようにする）。

(2) 進路実現を目指した取り組み

生徒一人ひとりの進路実現のため、校内実力テスト、補習（平日・土曜・長期休暇）、模試などの取り組みのほか、各学年ともに、生徒及び保護者を対象とした進路説明会や進路講演会を実施している。進路説明会は本校教員が説明を担当し、進路講演会については外部講師に講演を依頼している。また2年生全員が夏期休業中にオープンキャンパスもしくはインターンシップに参加し、レポート提出を夏の課題としている。夏には希望者を対象とした首都圏大学見学会のほか、岐阜県高等学校進学指導連絡協議会の地区幹事校として、本校を含む美濃学区の高校生を対象とした名古屋大学・岐阜大学入試問題研究会を、本校を会場に実施している。

(3) 進路指導上の成果と課題

進路指導上の成果、とりわけ進学実績に関しては、フロンティア事業の推進とともに面目を一新した感がある。国公立大への進学率及び難関大学への進学率は、共に著しく向上したといえる。今後は、生徒一人ひとりの希望を尊重した上での進学実績の質的向上を目指すと同時に、キャリア教育的な観点からの進学指導のあり方を追究し充実させていく必要がある。このことに関しては、リーディングプロジェクト推進事業の項目で詳述したい。

Ⅱ リーディングプロジェクト推進事業について

1 県立高校改革リーディングプロジェクト推進事業の指定について

県教育委員会では、グローバル化や少子高齢化等の急速な社会情勢の変化に対応した高校改革を推進するため、「教育改革重点推進校（リーディングハイスクール）」を10校指定、本校もそのひとつに選ばれた。現在、本校では、3年間の計画で「地域の将来を担う人材は地域の教育機関で育てる」ことを目指した併設型中高一貫校設立に向けた調査研究と関連諸事業を推進している。

2 目指す生徒像・学校像

美濃学区では、本校が長年多くの人材を輩出してきたこともあって、本校に対する地域の期待が極めて高い。次世代を担う人材を求める声が高く、難関大学や医歯薬学部等を中心に、国公立大学への進学実績の向上を求める声も強い。しかし、今後の少子化社会を見据えた場合、少子化の進行が「優秀な生徒の他地区への流出」を誘発し、その結果としてこの地域の「教育力・人材養成力」が低下するとしたら、この地域にとって大変ゆゆしき問題である。ここはやはり、地域の教育力をしっかりと支えるためにも「地域の将来を担う人材は地域の教育機関で育てる」ことにこだわる必要がある。

具体的には、本校の特徴である「多様な興味と関心を持つ生徒を集めた文武両道の進学校」というアイデンティティを踏まえたこれまでの指導実績、特に平成15年以降推進してきたフロンティア事業を継続・発展させ、併設型中高一貫校設立に向けた調査・研究と関連事業を推進したい。その中で、本校が目指す生徒像・学校像は以下の通りである。

中高一貫の6年間に「地域の将来を担うグローバルな人材育成」と「懇切丁寧な学習指導」に取り組むことで、グローバルな視野を身に付けた生徒が、ふるさと岐阜県を支える「地域社会人」として将来の地域社会や経済・産業界、さらにはコミュニティの発展に寄与できる人材に成長することを目指している。同時に、将来どこで暮らそうとも、ふるさと岐阜県への誇りと愛着を持ち続ける心を育てることも目標に掲げたい（岐阜県教育ビジョン「清流スピリット」）。

目指す中高一貫校では「グローバル」、すなわちグローバルな視点を持った「地域社会人」の育成をキーワードに、ユネスコの「持続可能な発展のための教育（ESD）」を重視し、持続可能な社会の担い手として高い学力と豊かな人間性、ふるさとへの愛着と誇り、世界に通用する語学力と国際感覚を兼ね備えた人材の育成に取り組む。また、地域のコミュニティと連携した活動を重視し、異年齢集団との協同を通してリーダー性とよき職業観を育む取り組みを実践する。さらに学ぶ喜びを確かなものとして感じられる授業実践を追求する。

3 今年度の取り組み

(1) 本校ホームページ上での事業内容と進捗状況の周知。

(<http://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/>)

(2) 関市教育委員会“夢プラン”「関市21世紀中学生リーダー養成研修会」（平成25年8月21日実施）への参加。今後も継続し、「関ふるさと学習」事業にも協力・参加を予定。

(3) 最新視聴覚機器を使った双方向性授業の実施可能な特別教室を整備（平成25年9月末）し、アクティブ・ラーニング教室として電子黒板を活用した授業の開発を推進。英語のみならず、他教科にも可能な限り開放する。

- (4) 1年生・職業別ガイダンスの実施(平成25年10月3日)。実社会で活躍中の講師の方々から、実体験に基づく様々な話を伺い、自身の生き方や職業に関する認識を深める機会とした。県教委学校支援課長にも講師として参加していただいた。
- (5) 3年生・英語学習法講演会の実施(平成25年10月26日、11月9日)。中京大学国際英語学部講師(森山真吾氏)による英語学習法講義。3年生の希望者対象。第1回は英作文、第2回は英文読解について行われた。受講した生徒には好評であり、講演終了後も質疑応答が続いた。
- (6) 2年生・英語学習法講演会の実施(平成25年11月19日)。難関大学の受験指導に精通した予備校講師(駿河台予備校)の講話を間近で聴くことにより、自身の学習姿勢のあり方を振り返り、今後の学習に生かす機会とした。
- (7) 2年生・先輩を囲む会の実施(平成26年1月30日に実施予定)。同窓の先輩から研究や職業、学生時代の思い出等、様々な話を伺い、自身の将来や生き方について考える機会とする。
- (8) 1年生・英語学習法講演会の実施(平成26年3月20日に実施予定)。河合塾講師が来校予定。
- (9) 英語検定試験(TOEFLジュニア)の受験(平成26年3月24日実施予定)。1年次の英語力を客観的に測るため授業時間を使用して実施。
- (10) 先進校視察訪問の実施(併設型中高一貫校の教育課程に関する調査・研究)。プロジェクトに関わる小委員会を立ち上げ、メンバーを中心に併設型中高一貫教育の先進校を訪問し、調査・研究を進めている。報告書は職員会議での研修の材料とするほか、本校のホームページでも紹介している。

5 次年度以降の新たな取り組み

- (1) 英語スピーチ・プレゼンテーションコンテストの実施(随時)。論理的思考力、理論構築力、英語による発信力を育成するため、おもに1年生の英語授業時間等を活用して、英語ディベート、英語スピーチを行う。
- (2) AFS短期留学への補助(夏期休業中)。グローバル人材育成のために留学を支援する。留学希望者をスピーチコンテストなどで審査し、優秀者には留学補助金を与える。最大3名までを予定。
- (3) AFS主催国際サマーキャンプへの参加援助(夏期休業中)。英語で積極的にコミュニケーションしようとする意欲ある生徒の育成。全国から集まる中学生、高校生と積極的に交流することを促す。
- (4) 3年生・校内オープンキャンパスの実施(平成26年6月12日実施予定)。生徒の志望する国公立大学・難関私立大学(2校程度)の複数の学部学科の教官を招き、校内で各分野の模擬講義を開催する。

Ⅲ 今年度の実践例より ～1年生・職業別ガイダンス～

1 1年生・職業別ガイダンス実施要項

- (1) 主催： 1年生学年会・進路指導部
- (2) 趣旨： 実社会で活躍中の講師の方々から、実体験に基づく様々な話を伺い、自身の生き方や職業に関する認識を深める機会とする。

- (3) 期日： 平成25年10月3日(木) 6・7限(14:15～16:05)
- (4) 場所： 関高校1年生各教室、彩雲館、桜ヶ丘会館等
- (5) 形式： ア 外部講師(9名を予定)による講座
 イ 1講座(50分)×2 *質疑応答も含めて50分とする
 ウ 生徒は2講座を選択して受講する
- (6) 対象： 1年生生徒全員(280名)
- (7) 講師： ア 9名を予定
 イ 関高生が関心をもつ職種から選定
 (例) 研究者、医師、教師、弁護士、企業経営者等
 ウ 同窓生、保護者、地域住民その他に依頼
 エ 今年度の講師(順不同)
- ・ 神谷哲朗氏(研究者、東大工学部特任研究員、関高同窓生)
 - ・ 田内健二氏(研究者、中京大准教授、関高同窓生)
 - ・ 後藤忠雄氏(医師、郡上市地域医療センター)
 - ・ 野原謙太郎氏(企業経営、野原電研株式会社)
 - ・ 安江正基氏(弁護士、辻巻総合法律事務所)
 - ・ 森正昭氏(中学校長、関市立旭ヶ丘中学校)
 - ・ 岩崎ひかる氏(新聞社員、毎日新聞社中部本社広告部)
 - ・ 西川知広氏(大学事務職員、中京大学)
 - ・ 柿澤雄二氏(県教委・文科省)

2 講義の内容と生徒の感想(いくつかの事例から)

(1) 後藤忠雄氏(医師)の講座

ア 講義内容

へき地医療の実態について、郡上市和良地区を事例に解説。へき地医療のチーム編成の整備が進み、24時間・365日体制を複数名で担当することになったので、講演や学会にも参加できるようになった。病院の枠を超えて地域の健康や福祉を考え実践する医師が必要とされる。地域医療では医師不足が問題で、岐阜県の医師数は全国で下から10番目に少ない。

イ 生徒の感想

- ・ 岐阜の医師数が少ないということは知っていましたが、中濃地区が一番少ないということには驚きました。また、こんなに少ないということにもびっくりしました。へき地にはあまりいいイメージがありませんでしたが、すごく楽しそうだと思いますし、実際にへき地の医療にも関わってみたいと思いました。
- ・ 今はどんどん高齢化が進んで、以前よりさらに医師が求められていると分かった。また、へき地での医療というのは大切にしていかなければならないと分かりました。僕も医師になりたいと思ったし、地域の人との関わりを大切にしようと思いました。
- ・ 大きな大学病院が県外にたくさんある中、県内のへき地で地域医療を大切にしている後藤先生はとてもかっこいいと思いました。地域の人々により身近な存在である地域医療では、専門診療医と違い大部分をまかなえる総合診療医が必要だと分かりました。医師というと白衣を着て大きな大学病院で働いているイメージが強かつ

たけれど、後藤先生のように飾らずへき地で働いている方もいて、地域医療の大切さが分かりました。

- ・ 岐阜県内で街中へ行くと医者はたくさんいるが、へき地では無医村のところが多い。本当に医療が必要なところに届いていないのが現実だと分かった。だが単に医者がいたらいいというわけではなく、地域の人々と関わって医療を行わなければならないということが分かった。医療の「今」が分かってとても良かった。
- ・ 地域医療は、いろんな人の支えが必要なんだなと思いました。医療は一人でやるものではなく、「チーム」で動くことが大切なんだなと思いました。

(2) 安江正基氏（弁護士）の講義

ア 講義の内容

弁護士の内容を具体的に紹介。自身が高校時代に理系から大学で文転し、大学で法学を学んだこと、弁護士を目指したきっかけと大学時代のエピソードなど。就職を決めてから大学を選ぶのではなく、今自分が興味を持って追究していったらどんな就職があるかを考えることが大切だと力説。

イ 生徒の感想

- ・ 「ただ勝てばいいのではなく、利益を優先する」のが弁護士の考え方ということだったが、弁護士以外のことにも通じるかもしれないと思って、頭に残った。今までイメージしなかった仕事だったので、とても興味深く話が聞けた。なんかすごくいい話が聞けた気がして、勉強する意味がちょっと見えたかもしれない。
- ・ 弁護士というのは裁判などで闘っているイメージだけど、本当に大切なのは相手にとってどんなことが利益につながるのかを深く考える必要があり、人と深く関わらなければならない仕事だと分かりました。また、法律というのは人をしぼるものというイメージだったけれど、人と人が争うことを防ぐためにあらかじめ決められたルールで、人々が共存するためには大切なものだと考えることができるようになりました。
- ・ 弁護士という仕事も、話の内容もおもしろそうだなと楽しみながら聞いていました。安江先生は何事も「おもしろさ」を追求して、論理的に考えて行動していたようだ。自分は感情が行動を支配しているから、先生のように、冷静に行動していたらいいと思った。2人の先生に話を聞いてみて、2人とも「社会に役立つ」という言葉を使っていた。やはりこれから私たちに必要なのは「社会に役立つ」ことだと痛感させられた。
- ・ 弁護士というと裁判をたくさん行っているイメージがあったが、実際は事務的な仕事が多いと分かり驚いた。また裁判に勝つことが重要だと思っていたが、裁判をせず和解で終え、お互いの利益を考えた最善策をとることも多いと知り、弁護士は常に弁護人のことを一番に考えているということが改めて分かりました。

(3) 森正昭氏（公立中学校長）の講義

ア 講義の内容

教員採用試験の状況、教育現場の実際の様子、教員の人数の移り変わり、どんな教員が求められているかなどを解説。そのほか、教員の初任給や、学校現場で今問題となっていることや苦勞していること、また、具体的な問題(数学の星形の証明)を通して、考え方や見方、結論にいかに向って行くかを考えさせられました。

- ・ 授業をしていく上での楽しみや生き甲斐、また逆にいじめや不登校の生徒への対応など様々な問題も全て熱心に語られていたので、授業をすることだけでなく、様々な問題も含め学校生活全てが教師の仕事なんだなと思った。しかし、最後に給与の話をされ、現実を見られた気がした。
- ・ とても有意義なものになった。普段あまり知らないようなことも知れたし、大変な仕事だと分かったけれど、その上でやり甲斐がありそうで魅力的だと思った。特に学習面以外の問題の対応が重要だとよく分かり、参考になった。
- ・ 今学校がどんな教師を求めているのかを具体的に知ることができました。自分がどんな能力を身につけるべきなのかが分かりました。色々な例を出してくださり、内容が理解しやすかったので、話していることがよく分かりました。実際に問題に取り組むことが出来て楽しかったです。
- ・ 面白い話、資料ばかりで充実した時間でした。給料よりも職業観の方が大切かなと思いました。教師の応募資格やどのくらいの倍率があるのかななどもっと詳しく調べたいです。今日のガイダンスでもその辺りの話も聞くことができました。僕は教員を目指しています。今日の話聞いて、勉強を教えるということに加え、子どもとの付き合い、コミュニケーションの取り方、笑顔の大切さなど様々なことを学ぶことができました。
- ・ 今現在、現役で校長先生をやられている先生のお話だったので、話の内容がすごく具体的で分かりやすかったし、今問題となっている事も詳しく教えていただけて勉強になり、心に残りました。

IV 今年度実施予定の事例より ～2年生・先輩を囲む会～

1 2年生・先輩を囲む会 実施要項

- (1) 主催： 2年生学年会・進路指導部
- (2) 趣旨： 同窓の先輩から研究や職業、学生時代の思い出等、様々な話を伺い、自身の将来や生き方について考える機会とする。
- (3) 期日： 平成26年1月30日(木) 6・7限(14:15～16:05)
- (4) 場所： 関高校2年生各教室、彩雲館、桜ヶ丘会館等
- (5) 形式：
 - ア 外部講師(10名を予定)による講座
 - イ 1講座(50分)×2 *質疑応答も含めて50分とする
 - ウ 生徒は2講座を選択して受講する
- (6) 対象： 2年生生徒全員(280名)
- (7) 講師：
 - ア 10名を予定
 - イ 第一線で活躍する関高出身の社会人、院生・大学生に依頼。
 - エ 今年度の講師(順不同)
 - ・ 河合香織氏(ノンフィクション作家)
 - ・ 堀江耕太氏(義肢装具士)
 - ・ 尾藤望氏(弁護士)
 - ・ 石原進氏(静岡大学准教授)
 - ・ 若生幸也氏(富士通総研・北大)
 - ・ 小椋学氏(岐阜県農政部技術主査)

- ・ 島田亜由美氏（株式会社杉山製作所社長）
- ・ 小池純司氏（野村総研）
- ・ 各務成美氏（筑波大学生、株式会社 TOTO 内定）
- ・ 塚原和宏氏（長良小学校教諭）

V 職業観と生き方の育成を目指して

1 3年間を見通したキャリア関連事業の構想

リーディングプロジェクト推進事業に関わる今年度の取り組み、次年度の取り組みについては、前項で紹介したとおりである。この取り組みは地域の要請に応えたものであると同時に、生徒一人ひとりの自己実現に向けた取り組みでもあることがわかりいただけたかと思う。いずれの取り組みも、たとえば英語力のスキルアップであったり、職業や生き方について学ぶ機会であったり、自らの資質・能力を維持・向上させるためのキャリア教育的な学びの場である。これらの取り組みの中で、進路指導部としては、職業観と生き方の育成を目指した以下の事業を重点的に展開していきたいと考えている。（1）1年生・職業別ガイダンス、（2）2年生・先輩を囲む会、（3）3年生・校内オープンキャンパスの3事業を、3年間を見通した関連事業、「未来創造週間」（パートⅠ・Ⅱ・Ⅲ）と命名し、大学進学後の研究活動、職業、生き方についての認識を深める機会とするというものである。

2 「未来創造週間」

1年次の職業別ガイダンス（10月）では、本校生徒に志望者の多い職種で活躍されている第一線の方々多数を講師に招き、職業について考える機会とする。事前に各講師のプロフィールを紹介し、その職種について事前学習する機会を設ける。生徒は50分×2コマの講義を受講するので、ふたりの講師から話を聴くことになる。時間的な制約もあるが、事前学習の成果を生かし、活発な質疑応答を促したい。ガイダンス終了後は、受講した講義についてレポートをまとめ事後学習とする。事前学習の開始からレポート提出までのおおよそ2週間を、「未来創造週間」（パートⅠ）と命名し、この2週間を職業や生き方について深く考える機会とする。この間、学級担任は無論のこと、教科担任や部活動顧問等、教員の側も機会を見つけて積極的に自らの職業観や生き方について語ることをとする。

2年次の先輩を囲む会（10月）は、生徒たちにとってより身近に感じる同窓生の先輩を招き、1年次と同様、分散会形式で50分×2コマの形式とする。生徒により親近感をいだかせるため、講師の年齢層は学生・院生から30代・40代と、1年次の職業別ガイダンスの講師よりやや若い世代を増やす予定である。1年次と同様、事前学習からレポート提出までのおおよそ2週間を「未来創造週間」（パートⅡ）とし、教員側からの働きかけも積極的に行う。

3年次の校内オープンキャンパス（6月）は、生徒から人気の高い国公立大学・私立大学を2校程度、本校に招き、多岐にわたる学部学科の教官による模擬講義を実施する。1・2年次同様、生徒は50分×2コマの講義を受講し、大学での研究活動や学部学科選びについて考える機会とする。この種のイベントでは、国公立・私立を含め多数の大学から教官を招くのが通例であるが、本校での催しは、大学を2校程度に絞り、その大学を「まるごと」体感させることを狙いのひとつとする。教官のほか院生・学部生（できれば本校同窓生）、事務官にも来校を願い、模擬講義以外にも、下宿や奨学金等を含めたキャンパスライフ全般に

関わる事項の説明コーナーも設ける予定である。1・2年次同様、事前学習からレポート提出までの期間を「未来創造週間」（パートⅢ）とする。

3カ年を見通したこの試みは、いずれも保護者宛に案内を出し、保護者の積極参加も促すこととする。

3 今後の課題と展望

以上に述べたとおり、グローバルな視点を持った「地域社会人」を育成することを目標に掲げたリーディングプロジェクト推進事業を行うにあたり、進路指導部としては「職業観と生き方の育成」を重点置いた指導を展開したいと考えている。そのために、「未来創造週間」と命名した事業を展開する。この試みを当日のみのイベントに終わらせない手立てについても前述の通りであるが、残された課題も山積している。以下、その課題について触れ、本稿を終えたい。

(1) 成果の発表について

前掲の1年生・職業別ガイダンスの生徒感想文を読めば、生徒自身が講演内容に触発されている様子、職業や自身の将来について思いをめぐらせている様子が伝わってくる。その思考の過程を、成果として発表する機会を設けることが必要である。クラス単位、学年単位のプレゼンテーションのほか、進路委員によるポスターセッションを文化祭等の機会を利用して試みたい。

(2) 講演の形式の工夫について

通常行われているような講師による一方通行的な講演に終わらせることなく、質疑応答を活発化させることによって、双方向性を持たせる工夫も検討したい。実際、質疑応答をふんだんに取り入れた講座もあったし、講座終了後に講師と生徒の間で座談が続いた事例もあった。複数講師や生徒参加による座談会形式を取り入れることも一案である。

(3) インターンシップとの連携

本校では、2年次の夏期休業中に、オープンキャンパスもしくはインターンシップに参加しレポートを作成することになっている。現状では、オープンキャンパスに参加する生徒が大半で、インターンシップ希望者は1割に満たない程度である。リーディング事業のコンセプトでもある「地域社会人」育成のためにも、地元の企業や行政に関心を向けさせる必要がある。保護者や同窓生の協力を仰ぎつつ、インターンシップを充実させる必要がある。